

トマトの「葉かび病」と「すすかび病」

葉かび病（左図）と、すすかび病（右図）は、いずれも葉に輪郭不鮮明な淡黄色斑点を生じ、葉裏にビロード状のカビを生じる点でよく似ており、肉眼での識別は困難です。以前は葉かび病が主に発生していましたが、葉かび病抵抗性品種が開発されたことで、すすかび病が顕在化してきました。

特に、すすかび病は重症化し枯死に至ることが多いので、発病初期に肉眼だけの診断でなく、顕微鏡を用いて、いずれの病害か確認しておく必要があります。



もっとも典型的に両病害のビロード状のカビの特徴が出ている葉を並べてみました（左図）。

カビの色は葉かび病でやや薄く（左図の左）、すすかび病で黒っぽく見える（左図の右）傾向がありますが、病勢の進展具合や栽培環境によって逆転することもあります。

葉かび病でも病斑が古くなると色が濃くなったり、すすかび病でも発病したばかりでは色が薄いことがあるからです。

葉かび病かすすかび病か、はっきりさせるには、葉裏のビロード状のカビに、セロテープを軽く押し当てて採取し、スライドグラスにごく少量の水を垂らして貼り付け、顕微鏡で観察します。

葉かび病では米粒のような分生子が（左図）、すすかび病ではヒモのような分生子が（右図）見えるので、容易に識別できます。

